

へべれけでも議論をふっかけて負けても勝つても小紋さんだった 武田ますみ

この作者の今月の作には、小紋潤追悼の作が三首並んでいる。さすがに古くからの友人ならではの心のこもった三首である。この作、「へべれけでも議論ふっかけて……」とあるあたり、若き日の文学青年だった小紋君を彷彿とさせて、追悼歌として忘れがたい。

朝酒はうまくなかった昨晚の鍋の残り窓の陽射しと 高山邦男

この作者の六首も小紋潤への挽歌。親しくとことんまで酒を飲んだ後輩として、若き日の思い出をうたっている。第二句で切れる。徹夜で飲み、明け方近くに少しだけ仮眠した朝のけだるい空気が、そんな思い出をていねいに作品化している。酒飲みなら思い当たるだろう。

暗やみに雪山ふんわり盛り上がり飛行船のごと月光の射す 尾上 宏

雪山は北アルプスだと思う。作者の住む白馬村からは北アルプスがよく見える。この一首、下句の表現は苦勞したところだろう。奇妙に人工的な月光の見え方。月光に浮かび上がる雪山のやさしい表情。

オルガンの調べのような冬の湖いつでも来いとバツハは笑う 喜多宣夫

オルガンを媒体にして、冬の海の重みそして厚み、さらにはバツハへの連想の跳躍力が魅力的である。しゃべり言葉を入れた「いつでも来い」の部分が、一首のアクセントになっている。

短歌の現在

No.457 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

二次元の美貌の刷ける光在れば相姦劇の濃き闇すずし 峰尾 碧

三島由紀夫の戯曲による演劇を見ての一連。相姦劇は近親相姦をあつかったドラマの意味だろう。「二次元の美貌の刷ける光在れば」はむつかしいが、絵のことだろうと読んだ。闇の部分も美貌の絵に照らされるようだというのだろう。

久に訪ふ牟岐町のはづれの山頭火石碑のしぐれて寂しくみたり 松田英美

山頭火は昭和十四年十一月三日に、牟岐町をたずねている。「四国遍路日記」に「いそいだけれど牟岐へ辿り着いたのは夕方だった。よい宿が見つかってうれしかった、おじいさんは好々爺、おばあさんはしんせつでこまめ、好きな人柄で、夜具も賄もよかつた、部屋は古びてむさくるしかつたが、風呂に入れて貰つたのもうれしかった、三日ぶりのつかれを流すことが出来た」とある。句碑の句は、同日の日記の中にある「しぐれてぬれてまつかな柿もろた」。徳島県の十一月の柿の木に残っていた真つ赤な熟柿をもらったのだ。

弱き陽を剛きクレーンが掻きまはす鉄骨梁吊り右へ左へ 岡田恵美子

高層ビル建設中の現場で動くクレーンが題材。「弱き陽」と「剛きクレーン」を対比し、あたかもクレーンが自分の意志で動いているかのように表現して、作品の輪郭をくつきりさせている。狙いがやや露骨だが、この程度ならいいだろう。